

「真夜中のポトフ事件」

家族も街も寝静まった真夜中の台所。なまぬるいポトフの入った鍋にそっと手を突っ込み、宙を仰いでいるのは中学生の頃の私。すべての始まりはこの時だったように思う。

(中略)

その日も、たぶん、なんとはなしに、台所へ足を運んでいた。

真夜中。冷蔵庫のぶーん、という音だけがやけに大きく聞こえる。

ガス台には夕飯の残りのポトフが鍋に入ったまま、ぼつんと置いてあった。

別におなががすいていた訳でもなかったのだけれど、なんとなく蓋をあけて中身を確認。

うん、ポトフだ。

分かりきった確認作業を終えたその瞬間、ふと鍋の中に、手を入れてみたい衝動に駆られた。

その日に限ってなんでそんなことを思ったのか、今となっては謎だが、真夜中独特の空気に魔が差したのかもしれない。思考する間もなく気付いたらもう手は半分鍋の中に浸っていた。

まだうすくなまぬるい液体は不思議な感触だった。液体と体温の境界線が曖昧になって自分の輪郭が一瞬ぼやける。肉を掴み取り、引き上げ、手にスープの汁を滴らせながら、そのまま肉を口へ運ぶ。やってはいけないことをやっている、という罪悪感は徐々に快感に変わり、なにかの感覚が剥き出しになっていく感じがして静かにドキドキしていた。肉を手で掴んだ時の手触りと温度、口の中で感じる食感と湿度。鼻に抜けるにおいと味。静寂に響き渡る自分の咀嚼する音。肉を喰いちぎるおと。肉のカタマリが食道を通過して胃袋に落ちていく感じ。それらは普段たべものを食べている時の感覚とは全く違う鮮やかさで身体に響いてきた。肉を食べている、という実感がいつもよりリアルだった。

「たべる」とはなんて沢山の感覚を使う豊かな行為なのだろう。ちょっとだけ、いつもと違う食べ方をしただけなのに、見える景色、感じる鮮度が変わりと反転したことに呆然としていた。自分の中のあたり前はぐらり揺らぎ、なんだかスキップしたい気分だった。それは小さいけど大きな発明みだった。

そのあととはしばらく、ふるえながら台所に棒立ちし、宙を仰いでいたのを覚えている。その夜はそのまま眠れずに朝を迎えることになった。

私はこの日以来「たべる」という体感や「たべる」のまわりにあるさまざまな事に興味が湧き、一日三食をいちいち立ち止まらずにはいられないという、とてもやっかいな青春時代を送ることになる。

それは同時に、素晴らしく豊かな時間を手に入れた瞬間でもあった。